飄亭、不折、子規と三陸大津波

――「海嘯」十四句をめぐって――

加藤定彦

犬骨坊、不折の被災地取材

明治二十九年六月十六日、新聞「日本」は、治安妨害を理由に発行停止処分を受けた。停止を解除されたのは一週間後の二十四日で、その一面に「解停社告」と巻頭論説、三陸大津波の被災状況を取材した雑報、特派員ナンパチ（＝浅水南八）「海嘯惨記（一）（二）」、特派員犬骨坊（＝五百木飄亭）「海嘯実記（一～三）」が掲載される。犬骨坊の記事には、「大海嘯の報は『日本』停刊の報と共に来る。即ち不折画伯と共に結束して急行先づ仙台に向ふ」との前文がある――陸羯南主幹の新聞「日本」は、時の外務大臣大隈重信の日独通商条約の改正に反対を主張し、発行停止処分三十回、二百三十日に及んだ――。

犬骨坊と中村不折の二人は仙台に着くと警察署や赤十字社で被害状況を取材するが、被害甚大のため混乱、さしたる情報を得ないまま二時間ばかりをまどろむ。翌早朝、仙台を発って石越で下車、破れ俥をやとってまず志津川に向かう。途中、米谷から山間の悪路を歩き、黄昏方に志津川に着く。宿をもとめて二、三軒の旅宿を叩くが断られ、漸く飲食店に泊まることを得、すぐに就寝。翌日、警察分署長に被災状況を取材、その概況と分署長の談話を報ずる。

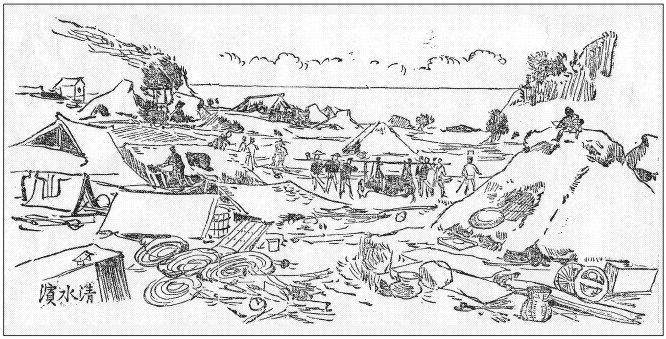
二十日正午、二人は志津川の新町を発ち、もっとも惨状を極めるという、一里ほど離れた清水浜に向かって山路を辿る。薄板で造った棺桶を積み重ねてある路傍に粗末な一軒の小屋があり、その柱に「罹災者救護事務所」と筆太に書かれている。巡査八名がそこに出張していて、草鞋を履

いたまま縁に腰掛けていた。二、三日前に到着以来、不眠不休で人夫らを指揮し、屍体の発掘や倒壊家屋の取り片付けに当たっているのだという。

巡査の談では、津波のあった日、昼間に軽い地震があっただけで、海上も平穏であった。「夜に入りて間もなく沖中にどうどうと物の轟く響きしけるよと思ふ途端、恐る可き大海嘯は一時に崩れかゝりて見るがまに一部落を持ち去りしは唯だ夢の心地より外はなかりし」という。

浜に降りると、破壊家屋の残骸や家具類が一面に散乱し、所々に屋根ばかりが据わっている。そこらを忙しげに取り片付けの人夫が行き来している。犬骨坊は、「親を失ひ子を奪はれし男女の眼を泣き腫らしたるがよろ〳〵と逍遙ふも悲しく、或は我住みしかたみのみなる家に集ひて物の具を拾ひ居る、或は斃馬の早や打腐りたるが、ものに押へられて臥したる、何れか惨状を極めざる。さても亦、今掘り出されし屍体の凄まじさ、心弱き者は唯一目にて悪夢に襲はるべし。云々」と報じ、その悲惨な光景を筆にした不折挿絵も掲載されている（挿絵図版「清水浜」参照）。二十五日掲載「海嘯実記（四）」にはつづいて取材した細浦の惨状も挿絵とともに報じられている。

その午後、再び山路を辿って隣村歌津村に入る。まず伊里前の小学校に仮設された赤十字社仮病院を訪ねたところ、総患者数は五十二名で、そのうち入院患者は十八名。勉強机を手術台やベッドに利用しつつも清潔に整頓され、派遣された赤十字医員二名、事務員一名、看護婦二名、地元医師一名（補助員）、高等学校生数名が救護・治療に当たっていた（「海嘯実記（五）」二十五日掲載、不折挿絵「伊里前に於ける学校代用の赤十字病院室内の光景」）。

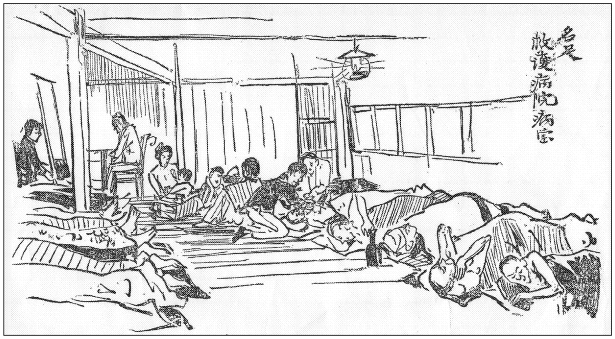


中村不折挿絵「清水浜」―新聞「日本」（明治29・6・25）―

夕刻、同病院を辞して小泉に向かおうとして、同校教員に道路等が寸断、破壊されていて夜間は無謀だと諌められる。逡巡した二人は、添書をもらい、途中の名足（なたり）まで歩く。

山路を二里ばかり、人影もない夕闇のなかを辿り、急峻な坂を下りて名足の海岸に着く。

宿を確保しようと訪ねたけれども目当ての人が不在、その足で名足救護所に赴き、被害状況を取材。救護所は古びた小学校に仮設され、第二師団派遣の衛生部員即ち二等軍医と二等看護長各一名、看病人七名、助手の高等学校生二名という治療態勢で、医療資材はわずかに包帯箱一箇と薬剤行李一箇だけという貧弱さ。それに反し患者総数は七十九名、うち男は三十四名、女は四十五名。大半は外科で、重症は五分の二、他は皆軽症。入院患者三十一名は皆重症で、男が六名、女が二十五名。屋根は破れて星の光が漏れ、荒壁もところどころ崩れ、軒は朽ち、床板もひび割れて踏めば抜けそう。わずか一つ吊り下げたランプが照らす床の上に藁を敷き、破れ蒲団を重ね褥としている。弊衣をまとい苦しげにうめき声を発しつつ身を横たえる女は顔といわず手といわず撮傷による紫色の瘡蓋だらけ。あるいは腕を折られ、脚を砕かれ、頭をわられ、胸を裂かれ、いずれも白い布を巻かれている。親か子か夫か妻かも判然とせず、その枕辺で肉親が涙ぐみ、互いに太いため息をついている。妊婦らしく腹のふくれた女だけが疲労困憊したのか、「唯すや〳〵と夢心地のおもざしのあはれさよ」云々と、伊里前病院とは打って変わった劣悪な環境のもとに置かれる被災患者に同情の涙を絞り、「同時に先年に於ける戦地病院の光景を回顧せざるを得ざりき」と衛生兵として出征した日清戦争時の体験を想起している（「海嘯実記（五）」二十七日掲載、不折挿絵図版「名足救護病院病室」参照）。



中村不折挿絵「名足救護病院病室」―新聞「日本」（明治29・6・27）―

夜八時頃になっても宿のとれないまま二人は海岸に立ち、被災地の夜景を眺めていると、斃馬を焼いた火が燃え残っているのか、時々ホロホロと燃え立つのが鬼火のごとく明滅する。「不折、長息、天を仰いで愁然として嘆じて曰く、ア、惨なるかな、凄なるかな、名足の夜景、誰れか之を見て心を傷ましめざるものぞ、と直に筆を叱して朦朧の月下

に一幅の画を為す」（不折の挿絵には「野足（ママ）の夜景／歩して野足の海岸に到れば暗雲海を鎖して涛声怨むが如く、月色朦朧として馬を焚くの幽火、処々に明滅す。四顧、凄絶、夜気人を襲ふ災後の夜景、何ぞ客を痛ましむるの甚しき」と記入、二十六日掲載）。

その後二人は中山、馬場、泊瀬、田の浦、小泉村などを取材し、二十二日夕、気仙沼に着く。「海嘯実記（七）」（二十七日掲載）によると、同地に着いた後、汚染した飲料水を飲んだため不折は激しい腹痛を起こしてダウン、犬骨坊も腹痛気味となった。翌朝、不折の腹痛は治まったけれども、体力の消耗を気遣って強いて宿に残し、犬骨坊はひとり気仙沼を発ち、取材をつづける。

「海嘯」十四句の掲載

五日後の二十九日、「日本」紙上に、「海嘯」と題する無署名の時事俳句十四章が載る。

六月十五日、恰も陰暦の端午に際して東北海岸幾万の生霊は一夜に海嘯（かいせう）の為めに害（そこな）はれおはんぬ。あはれ是れ程の損害、天災にも戦争にも前代未聞の事どもなれば、聞くこと毎に粟粒を生ぜずといふことなし。

と前書き、

ごぼ〳〵と海鳴る音や五月闇
菖蒲葺いて津波来べしと思ひきや

の二句からはじまり、前書きを所々に挟んで全十四句からなる。『子規全集』第十二巻の解題によると、十三句が子規句集『寒山落木』に収められているから子規の作であることは間違いない。

「ごぼ〳〵と」の句は、ナンパチの「海嘯惨記（一）」に「六月十五日の夜、将に八時半を報ぜんとするとき、何物か海天の一方、百雷の一時に轟然たるが如く、万砲の一斉に火蓋を切りたらん如き音響を聞く」、犬骨坊の「海嘯実記（一）」に「金華山方面の沖合にあたり轟然たる奇音を伝ふるもの前後二回、其状恰も大砲の如く、同時に金華山付近に強大の地震あり、次て海嘯起ると有りし由にて」と記す大音響を詠んだもので、「ごぼ〳〵」はさしずめ現代語の「ゴォーゴォー」に当たろうか。「菖蒲葺いて」の句は、その日が旧暦で端午の節句に当たっていたからで、日清戦争出征者の凱旋を祝っていた村もあったとのことである。

日清戦争への従軍と喀血

子規は、明治二十五年十二月、新聞「日本」に入社、翌

二十六年二月から俳句欄を新設して選者となり、ほかにも社の同僚飄亭らと時事俳句を載せたり、馬骨（子規）、犬骨（飄亭）のペンネームで「時事句合せ」を合作したりしている。

明治二十七年八月、日清戦争が勃発すると、松山医学校出身の飄亭は衛生兵として応召、犬骨坊のペンネームで「従軍日記」を「日本」に連載する。子規がこの連載に刺激をうけたことは確実である。

子規が「日本」に発表した「四年間」の付録、「五百木飄亭」（明治二十九年）にも、

廿七年、日清戦争の端を開くや、彼は予備を以て徴集せられ看護長として第五師団に従ひ、平壌を初とし、九連城、鳳凰城、諸所に戦へり。俳人の従軍せしもの、古に於て例なきは言ふ迄も無く、今後亦多くあらざるべし。彼は此点に於て彼の伝記の上に色彩を施したるのみならず、彼が豪壮を好むの性は、此千歳一事の好機会を得て、幾多の佳句を作り出だしたり。中に朝鮮、支那に於ける景色、家屋等の特色を現はしたる者あり。（引用四句、省略）外国の事物を俳句の材料とせし者、実に飄亭を以て初とす。其戦争、陣営等に関する句、最多し。

以下に十四句を引用、

陣更けて独り胡歌聞く月夜かな
骸骨の睨みあふたる尾花かな
小春日や陣屋々々の虱狩
筒音に白雪卍巴かな
剣を抜いて夢に敵斬る寒さかな
敗城の煙まれなり冬木立

など、新聞記者らしい観察眼による佳句を見出す。

松山では旧藩主久松定謨（さだこと）が、旧藩士子弟のなかから優秀な人物を育てるため、東京に常盤会をつくって学資を提供したが、その第一回の給費生に子規は選ばれ、明治十七年から同二十五年までその恩恵をうけた。

定謨は子規と同年で、北白川近衛師団長の副官として日清戦争に出征している。身体の丈夫でない子規は、定謨や国家の恩義に少しでも報いるべく従軍記者を志願、翌二十八年三月三日、内藤鳴雪ら友人に見送られて東京を発つ（中村不折も志願、大阪師団に従軍）。父親の墓参りのため郷里松山に寄ってから、広島で定謨と同じ近衛師団に従軍する許可を得る。三月三十日、広島で定謨の送別会が催され、出席。このとき、定謨から長刀を拝領、これを手にして記念写真を撮影し、従弟藤野古白に呈している。四月十

日、定謨と同じく海城丸に乗船、

行かば我れ筆の花散る処まで

と詠み、勇躍、宇品から出航、十三日、遼東半島の先端、大連湾に入港する。

十五日、やっと柳樹屯に上陸、ただちに金州へ赴き、

大国の山皆な低き霞かな

と詠む。金州滞在中は戦闘の跡などを訪ねて取材するが、到着二日後の十七日に講和条約が締結し、定謨や不折と散歩したり、高級割烹店に招待されたり、支那の子供芝居を見物している。なかでも興味深いのは、第二軍兵站部軍医部長の森鷗外を毎日訪ね、俳談に時を過ごしていることである（森鷗外「徂征日記」）。

従軍中の詳細は「陣中日記（一～四）」「従軍紀事（一～七）」として新聞「日本」および「日本付録週報」に連載されるけれども、「陣中日記」翌五月十日の記事に「講和成り万事休す」と記されるように、講和条約の批准で武勲（？）の夢はあっけなく泡沫に帰した。その日、近衛師団付記者たちは帰国のため、金州から柳樹屯に移動となり、子規は鷗外に蕪村の高弟、几董の連句を手写した一冊を贈り、別れを告げる（「徂征日記」）。

記者仲間と佐渡国丸に乗り故国に向け出航したのはよいが、老朽船ですこぶる環境劣悪、そのため五月十七日、喀血。翌十八日、下関に着くけれども、コレラによる死亡者が出て一週間停船。二十二日、やっと和田岬（神戸市兵庫区）に着岸する。

病漸く重し

須磨の灯か明石のともし時鳥

の句は、いうまでもなく鳴いて血を吐くという子規（ほととぎす）に自らを仮託した作。翌二十三日、検疫所に入り、午後になって放免されたものの喀血がひどく、そのまま神戸病院に入院する。「我門出は従軍の装ひ流石に勇ましかりしも、帰路は二竪（病気の意）に襲はれてほう〳〵の体に船を上りたる見苦しさよ。云々」（「陣中日記」）と日記を終えているが、心中、屈辱感には癒しがたいものがあったにちがいない。

子規庵への帰還

危篤状態を脱した子規は、七月下旬、退院してから須磨保養院に移り、八月下旬、郷里の松山に戻る途中、帰国して広島の病院に勤務中の飄亭を訪ね、

秋風や生きてあひ見る汝と我

と無事の再会を喜び、その下宿に三泊している。松山に着

いた子規は伯父大原恒徳宅に二、三日を過ごした後、八月二十七日、松山中学に奉職する夏目漱石の居宅に転がり込み、柳原極堂の懇請により松風会会員の句作指導を引き受ける。

十月下旬、大阪を経て奈良に遊び、

柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺

の佳吟を得る。その月末、東京根岸の自宅に漸く帰還する。

翌明治二十九年一月三日、子規庵で催された新年句会には、

元日の人通とはなりにけり　子規
大仏の背に小春の日かげ哉　飄亭
先生や屋根に書を読む煤払　漱石
鷹それて岩角高き吹雪哉　虚子
おもひきつて出で立つ門の霰哉　鷗外
冬川の家鴨よごれてつどひけり　碧梧桐
井戸端の鍋も盥も霰哉　鳴雪

などと、飄亭、虚子、鳴雪、碧梧桐の常連に軍医学校長となった鷗外や上京した漱石も出席して賑やかだった。

しかし、二月には大阪で発症した腰痛が悪化、左腰が腫れて寝たきりとなった。三月十七日、リウマチの専門医に診察てもらい、結核性脊髄炎と診断された。のちカリエスと判明、同月二十七日、手術を受けた。「余程の大望を抱きて地下に逝く者はあらじ…」と絶望の淵に突き落とされたが、小説を読んで気力を回復、四月初旬には歩行も少しずつ可能となった。同月二十一日から新聞「日本」に「松蘿玉液」の連載をはじめ、五月四日には「小説はたしかに薬よりもきゝめ多し」と小説の効用を説き、樋口一葉の「たけくらべ」を賞賛し、同月十八日には鷗外が創刊した文芸誌「めさまし草」を批評したりもする。

「海嘯」十四句のもつ意味

かくして同年六月二十九日、無署名で「海嘯」の発表となる。読み比べてみると、

海松かゝるつなみのあとの木立かな

昼顔にからむ藻屑や波の音

は、「あるべき筈なき高き喬木の枝には海藻、魚介の類を留め、誰れか木に縁て魚を求むるを出来得べからざること、いふ、今回の海嘯即ち之れ有りき」（ナンパチ「海嘯惨記（一）」）に依拠、

短夜やほろ〳〵燃ゆる馬の骨

は、前出の犬骨坊「海嘯実記（五）」の名足海岸の夜景を描写した、「馬を焼く焚火の今は早や幽かに消え残りなが

ら猶ほ時々ほろ〳〵と燃え立ちたる、恰も鬼火の明滅するが如く、云々」に依拠している。

幸にして生き残りたるは親を失ひ子を失ひ、夫を失ひ妻を失ひ、家を失ひ食を失ひ、命一つを浮世にもてあましたるもなか〳〵にあはれならぬかは。

皐月寒し生き残りたるも涙にて
生き残る骨身に夏の粥寒し

天下の人、誰か之を悲まざらん。死したるは棺なく、生きたるは食なきに。

五月雨は人の涙と思ふべし

といった被災者の身に寄り添った切実な句も、やはり特派員犬骨坊と不折が取材して送って来た「海嘯実記」の記事や挿絵に共振したものであろう。

先般、図書館の方から展示にともない「海嘯」十四句について短文を書くように依頼された。はじめは、同僚記者の飄亭や不折の八面六臂の活躍ぶりを紙面で目にした子規が、刺激されて負けん気から、唯一可能な対抗手段として「海嘯」十四句を発表したようにおもわれた。それだけ二人の取材力、表現力が卓越していたのだが、つぶさに点検してみると、単純なライバル心だけで詠んだのではなさそうである。幾度も死の淵にさまよった深刻な体験が、過酷な状況に置かれた三陸の被災者たちへの抑えがたい同情となり、子規をして真率な「海嘯」十四句を結晶させたのであって、それによって子規はまた新聞「日本」の記者として最低限の使命を果たすことが出来たのである。

＊引用に際しては、旧漢字を常用漢字に改め、適宜ルビや句読点を補った。

（かとうさだひこ　立教大学教授）